

## 社会福祉士養成の学部教育の在り方に関する検討： 死生観調査を通して（第2報）

村 上 信<sup>※1</sup> 濱 野 強<sup>※2</sup>  
佐 藤 真由美<sup>※3</sup> 宮 下 榮 子<sup>※4</sup>  
藤 澤 由 和<sup>※5</sup>

### 1. はじめに

近年、社会福祉士養成教育では、学生の死生観をいかに育てるかという課題に直面している（村上，他 2012）。近年では、社会福祉士養成に限らず、介護福祉士（宮下 2009）、看護師（石田，他 2007）の教育現場においても共通の課題として浮き彫りになっている。しかしながら、学生にとっては非日常である「死」という出来事について、どのような教育内容をいかなる実践方法で行うべきかという論点について十分な検討が進められてきたとは言い難い。さらには、教育内容・方法の検討に際して基盤的知見となる学生の死生観の認識を論じた研究も限られている。こうした現状が、学生が「死」を現実の出来事として向き合うことを困難にし、また自身の死生観の形成における障害となり、ひいては現場実習での挫折や就職後の離職につながっていることが考えられる。

以上の背景に基づき、筆者らは社会福祉士養成校であるS大学の学生を対象として、死生観に関する検討を進めてきた。その結果、学生の死生観は、2011年の東日本大震災の報道等によって影響を受けた可能性が推察された（村上，他 2012）。すなわち、東日本大震災を契機として「死」を考えるようになった学生群では、「死」に対する意識が変化していない学生群に比べて、死生観尺度の「死への恐怖・不安」「死からの回避」において高値が認められた（村上，他 2012）。どちらの下位尺度も「死」に対する直接的な認識を問う内容より構成されていることから、震災時に人々が津波から避難している報道、住宅火災、遺体の収容に関する報道等が学生の認識に影響を及ぼしたものと考えられる。言い換えれば、学生にとって視聴覚映像は、時に非常に強いメッセージとなり、現実的に「死」を捉えることへの抵抗感を煽ることも危惧される。

※1 総合福祉学部 教授，※2 島根大学プロジェクト研究推進機構 専任講師

※3 社会福祉法人つばめ福祉会，※4 国際医療福祉専門学校 七尾校 介護福祉学科 学科長

※5 静岡県立大学経営情報イノベーション研究科公共政策系 准教授

そこで、本研究では、東日本大震災の報道等を通した「死」に対する認識の変化と個人の「死」の経験との関係を紐解くことで、視聴覚教材を用いた死生観教育のあり方への示唆を得ることを目的とした。具体的には、東日本大震災を契機として「死」を考えるようになった学生（97名）に着目し、親しい人の「死」という身近な経験が死生観に及ぼす影響について定量的な検討を行った。

## 2. 方 法

### (1) 調査方法

本研究では、平成23年7月にS大学の学生を対象として自記式のアンケート調査を実施した。なお、本調査は、無記名で実施し、調査への協力も本人の自由意思とした。調査では、119名の学生より回答を得たが、本研究では東日本大震災を契機として「死」を考えるようになった学生（97名）を分析対象とした。なお、回答者（119名）の属性は、先行研究の通りである（村上，他 2012）。

### (2) 調査項目

死生観は、先行研究で信頼性、妥当性が示されている尺度を用いた（平井，他 2000）。本尺度は、死後の世界観（4項目）、死への恐怖・不安（4項目）、解放としての死（4項目）、死からの回避（4項目）、人生における目的意識（4項目）、死への関心（4項目）、寿命感（3項目）の7つの下位尺度から構成されている。学生には、「当てはまる」から「当てはまらない」の7つの選択肢より回答を求め、分析では「当てはまる」を7点として「当てはまらない」が1点になるよう得点化した。その他には、性別（男性・女性）、学年（1年生，2年生，3年生，4年生）、特定の宗教の信仰（信仰している，信仰していない）、1年以内の親しい人の死の経験（経験している，経験していない）、2011年3月11日の東日本大震災をきっかけに死について考えるようになったか否か（考えるようになった，考えるようにならなかった）に関する質問項目で構成した。

### (3) 分析方法

分析対象者特性の比較では、親しい人の死を経験した群と死を経験していない群について $\chi^2$ 検定を用いた。同様に、死生観下位尺度の2群比較では、Mann-Whitney検定を行った。なお、統計解析はIBM SPSS Statistics 20を使用し、有意水準が5%未満を有意な差と判定した。

## 3. 結 果

分析対象者の特性を表1に示した。1年以内に親しい人の死を経験したと回答した学生

は18名（18.5%）であり，その内訳は女性が13名（72.2%），学年は2年生が最も多く15名（83.3%），特定の宗教を信仰していない学生が16名（88.9%）であった。その一方で，1年以内に親しい人の死を経験していないと回答した学生は79名（81.4%）であり，その内訳は女性が61名（77.2%），学年は2年生が最も多く69名（87.3%），特定の宗教を信仰していない学生が69名（87.3%）であった。分析対象者の特性については，両群で有意な差を認めなかった。

表2に親しい人の死を経験した群と親しい人の死を経験していない群について死生観下位

表1 分析対象者の特性

	身近な人の死を経験した（18名）		身近な人の死を経験していない（79名）		有意確率
	人数	%	人数	%	
性別					0.653
男性	5	27.8	18	22.8	
女性	13	72.2	61	77.2	
学年					0.313
1年生	0	0.0	4	5.1	
2年生	15	83.3	69	87.3	
3年生	2	11.1	2	2.5	
4年生	1	5.6	4	5.1	
特定の宗教					0.890
信仰している	2	11.1	9	11.4	
信仰していない	16	88.9	69	87.3	
無回答	0	0	1	1.3	

表2 死生観の下位尺度別得点

	身近な人の死を経験した			身近な人の死を経験していない			有意確率
	人数	平均値±標準偏差	中央値	人数	平均値±標準偏差	中央値	
死後の世界観	18	18.1±4.86	19.5	78	19.2±6.47	19.5	0.446
死への恐怖・不安	17	21.0±6.14	24.0	78	19.9±6.63	22.0	0.613
解放としての死	18	15.1±6.39	15.5	78	11.8±6.18	13.0	0.043
死からの回避	18	12.6±6.38	13.5	78	12.4±5.52	12.0	0.873
人生における目的意識	18	13.3±5.58	12.0	78	14.8±4.92	15.0	0.307
死への関心	18	18.0±5.38	18.0	77	15.3±5.40	16.0	0.067
寿命感	18	13.9±4.39	15.0	78	10.4±5.56	11.5	0.016

尺度の比較を行った。その結果、親しい人の死を経験した群では、親しい人の死を経験していない群に比べて下位尺度である「解放としての死」「寿命感」の中央値が有意に高いことが認められた。その一方で、「死後の世界観」、「死への恐怖・不安」「死からの回避」「人生における目的意識」「死への関心」は、有意な差を認めなかった（表2）。

#### 4. 考 察

筆者らは、先行研究において学生の死生観が震災という社会的事象によって影響を受けた可能性を指摘した（村上，他 2012）。特に、今回の東日本大震災は、被害規模が甚大であることから、多くの学生がテレビ、新聞等の報道に接し、「死」を考える契機になったことが想定される。そうした中で、一連の報道が未だ死生観が深まっていない学生にとって非常に強いメッセージとなり、現実的に「死」を捉えることへの抵抗感を煽ることが危惧された。そこで、本研究では、前報（村上，他 2012）で得られた知見の考察をより深めることを目的として、親しい人の「死」というライフイベントとの関係を検討した。

分析前の仮説としては、「死への恐怖・不安」「死からの回避」「死への関心」において、身近な人の死を経験した群と身近な人の死を経験していない群で有意な差を認められることが想定された。すなわち、身近な人の死を経験した群では、震災報道に直面しても、「死」への過度な不安や恐怖が喚起されず、「死」を現実の出来事として捉えることができると考えた。しかしながら、解析では、「死への恐怖・不安」「死からの回避」において、身近な人の死を経験した群と身近な人の死を経験していない群で有意な差を認めなかった。この理由の一つとしては、上述の通り震災に関する一連の報道等が学生にとって非常に大きなインパクトになっていることが考えられる。つまり、ある種非日常的な出来事である災害により生じた「死」という出来事が自己の中で一般的な「死」として認識が深まった可能性が考えられる。こうした状況は、今後、学生が職場で接するであろう高齢者等の「死」とは状況が異なっていることから、死生観の醸成を意図して視聴覚教材を用いる際には、学生の状況を踏まえた丁寧な検討が必要であると考えられる。

その一方で、他の下位尺度である「解放としての死」において身近な人の死を経験した群は、身近な人の死を経験していない群に比べて中央値が高い状況が示された。「解放としての死」は、「私は、死とはこの世の苦しみから解放されることだと思っている」「私は死をこの人生の重荷からの解放と思っている」「死は痛みと苦しみからの解放である」「死は魂の解放をもたらしてくれる」という質問項目より構成されている。質問項目からも明らかとなり、テレビや新聞等の報道から得る情報により変容することが難しい認識の一端であると考えられ、身近な人の「死」という経験を通して初めて「死」に対する感情を理解することができると考えられる。また、「寿命感」についても、身近な人の死を経験している群では身

近な人の死を経験していない群に比べて中央値が高い状況が示された。「寿命感」は、「人の寿命はあらかじめ「決められている」と思う」「寿命は最初から決まっていると思う」「人の生死は目に見えない力（運命・神など）によって決められている」から構成されている。上記の「解放としての死」と同様に、学生にとって現実の出来事として理解が難しい「死」というライフイベントをより身近で、現実的なこととして受け入れることができたためと考えられる。

その他、「死への関心」については、身近な人の死を経験した群で身近な人の死を経験していない群に比べて有意差を認めなかった。「死への関心」は、「「死とはなんだろう」とよく考える」「自分の死について考えることがよくある」「身近な人の死をよく考える」「家族や友人と死についてよく話す」から構成されている。分析前では、震災という社会的事象と身近な人の死の経験という要素が揃って初めて家族間にとどまらず、友人間でも「死」をキーワードとしたコミュニケーションの促進につながると考えていた。有意差が認められなかった理由の一つとしては、震災が学生にとって非常に大きなインパクトを持ったために、「死」に関するコミュニケーションが自然となり、そうした状況が身近な人の死を経験していない群でも「死」についての関心やコミュニケーションの促進につながったことが推察される。また、「死後の世界観」については、死を経験した群と経験していない群で有意な差を認めなかった。「死後の世界観」は、「死後の世界はあると思う」「世の中には「霊」や「あたり」があると思う」「死んでも魂は残ると思う」「人は死後、また生まれ変わると思う」という質問項目から構成されている。看護学生を対象とした先行研究では、「死」を自分自身のこととして受け止める経験ができない場合に「死後の死生観」の得点が高くなることが示唆されている（石田、他 2007）。一方で、近年、社会福祉学の領域では、個人の精神性に関する議論も示されている（村上、2008）。したがって、今後は、こうした議論を踏まえながら社会福祉士教育が目指すべき方向性の中で、身近な人の死が学生の死後の死生観に与える影響についての丁寧な整理と更なる検討が必要と考える。

本研究の限界は、第一に調査の実施がS大学に限られている。今後は、社会福祉士養成教育を行っている他大学で同様の調査を実施し、知見の一般化を図る必要がある。第二に本研究では、震災という社会的事象と身近な人の死の関係を検討したが、両者の発生時期の前後関係に関して明らかにすることができない。最後に、学生がどのような方法で東日本大震災に関する情報を入手したかについても明らかにすることができない。以上の論点は、今後、視聴覚教材の有用性を議論する上で情報の整理が必要である。

## 5. おわりに

本研究では、社会的事象である東日本大震災を通した「死」に対する認識の変化と個人の

「死」の経験との関係性を紐解くことで、視聴覚教材を用いた死生観教育のあり方の示唆を得ることを目的とした。その結果、単に視聴覚教材を活用した教育にとどまらず、「死」を現実の出来事として受け入れることが可能となる教育内容を合わせて実践することで学生の死生観がより深まることが考えられた。

## 謝 辞

本研究は、平成24年度科学研究費補助金（基盤研究(C)）「大学の学部教育における終末期ケアに関する社会福祉士教育の実証的研究（研究代表者：村上信）」における研究成果の一部を取りまとめたものである。

## 参考文献

1. 村上信, 佐藤真由美, 宮下栄子, 濱野強, 藤澤由和. 社会福祉士養成の学生の死生観に関する意識調査. 淑徳大学研究紀要. 46. 87-94. 2012.
2. 宮下栄子. 介護福祉士養成教育における「介護観」構築のための「終末期介護」教育の実践報告－学生の意識調査による検証－. 新潟医療福祉学会誌. 9. 20-24. 2009.
3. 石田順子, 石田和子, 神田清子. 看護学生の死生観に関する研究. 桐生短期大学紀要. 18. 109-114. 2007.
4. 平井啓, 坂口幸弘, 安部幸志, 森川優子, 柏木哲夫. 死生観に関する研究－死生観尺度の構成と信頼性・妥当性の検証－. 死の臨床. 23. 71-76. 2000.
5. 村上信. ソーシャルワークとスピリチュアリティに関する欧米と日本の文献の動向：2002年までの比較. 実践女子短期大学紀要. 29. 95-108. 2008.

## Research on Attitudes to Death: Evidence from Student Survey

MURAKAMI, Makoto

HAMANO, Tsuyoshi

SATO, Mayumi

MIYASHITA, Eiko

FUJISAWA, Yoshikazu

The aim of this paper is to explore effectiveness of an audio-visualized material in a training of social workers. Data from student survey was used to identify an effect of personal experience with death and experience of the earthquake disaster on death attitude. Our results implicate that combination between audio-visualized education and personal experience with death is needed to develop a fundamental understanding of death attitude.

